Hors thème

フランス語初級者と「書く」
―短文形式での発信事例の紹介と見えてきた課題―

モクタリ・シルヴァン
MOKHTARI Sylvain
関西日仏会館
mukaishiru(at)outlook.jp

鈴木　真太朗
SUZUKI Shintaro
東北大学
oratnihs1224(at)gmail.com

玉田　優花子
TAMADA Yukako
東北大学
ange.no.shirabe(at)gmail.com

村上　舞
MURAKAMI Mai
西南学院大学
murakami.mai.104(at)gmail.com

はじめに

昨今のフランス語教育では「聞く、話す」活動に焦点が当てられる傾向にあるが、それと表裏一体である「書く」活動も等閑に付してはならない。しかし初級者に初めから長文を書かせることは困難である。そこで筆者 4 名は、気軽に短文を「書く」ツールである Twitter を授業に導入してみた。すると学習者たちは、Twitter という手軽で開かれた場を利用して、他の学習者の投稿に触発され、「本物」のフランス語にも触れる喜びを味わいながら、能動的かつ継続的な発信を行うようになった。他方で、Twitter の特質を授業に適応させきれない場合もあった。本稿では、それらの具体的な事例を教員ごとに紹介し、短文形式による発信の成果と限界について考察する。その中で、Twitter を授業に導入するにあたっての具体的な手順や注意点にも触れた。フランス語初修者に楽しく学んでもらう工夫を考える際の一助となれば幸いである。

Twitter で楽しむフランス語

村上 舞　MURAKAMI Mai

筆者は大学の第二言語初級授業を主に担当している。授業を通して気づいたことは、フランス語に対する難しさに直面した瞬間から、フランス語に苦手意識を感じ、新しい外国語を学ぶ楽しさを、またその醍醐味を、学生は味わえてないのではないか、ということだった。

とはいえ、終始フランス語に抵抗感を抱いているかと言えば決してそうでなく、学生自身が見聞きして知っている語彙が出てくると、学生は前のめりの反応を示すのである。そのフランス語に対する前傾姿勢を保ちながら、フランス語を学ぶ楽しさを感じてほしいと思い、筆者は授業で学んだフランス語の語彙・文法を用いて、短文を Twitter で発信してみよう、と提案する

ことにした。つまり、Twitter を授業の内容の実践の場として紹介するという試みである[1]。

具体的には、毎回の授業冒頭に教科書で学んだ文法事項・語彙を用いて筆者が作ったフランス語の短文を紹介した。その筆者の例文を参考に自由に文を書き換えて Twitter に発信することを学生に促した。フランス語で Twitter に投稿した学生には、筆者が直接 Twitter 上にフランス語でコメント、もしくは簡単なフランス語で質問を投げかけるなどし、フランス語で学生とやりとりをした。Twitter が学習の現実的訓練の場となるように投稿への返信を工夫した。

その結果、最初の頃は筆者の例文を機械的に反復する投稿に留まっていた学生が、他の学習者の Twitter の投稿に刺激を受け、教科書や辞書で調べて、自分の日常をフランス語で発信するまでに成長した。またその投稿に対し学習者同士がフランス語でコメントをして楽しむ様子が Twitter 上で見られ、学習者間の対話という積極的活動を生み出すことに繋がった。

以上が学習者における効果であるが、当初筆者のねらいは、短文投稿を特徴とする Twitter を通じて授業で習得した内容を発信させることで、アウトプットする気軽さや手軽さを感じてもらい、学習を段階的に習慣化させ、それによる自信を付けさせてフランス語学習への楽しみや意欲を学生に与えることだった。確かに「Twitter をしていない学生に対するフォローはどうするのか」、との指摘もあるだろう。しかし少なくとも、フランス語初級授業で Twitter を用いたことは、教師と学生の双方向のコミュニケーションだけではなく、教室活動を越えて、他のフランス語学習者とフランス語の楽しさを共有する機会が生まれるという多方向のコミュニケーションのツールとして有効に機能したのではないだろうか。今後はフランス語既修者が学習を継続するために、学習を促進すると期待される SNS ツールの手軽で効果的な利用法の工夫を検討していきたい。

短文発信を通じて学ぶフランス語

モクタリ・シルヴァン　MOKHTARI Sylvain

外国語の先生が期待するのは、アクティブな学生ではないだろうか。クラスで積極的に参加する学生の姿はもちろんであるが、授業後も、外国語の勉強をし続ける学生がいてくれたら、それ以上の喜びはないと思う。だが、どうすればそのような学生を増やすことができるのか、難しいながらも、考えるべきである。解決方法を探る先生は少なくはなく、私の場合は、日本の大学でフランス語を教えていて、フランスの文化も紹介している。例えば、今人気のある歌手の曲を聞かせてあげたり、映画を視聴したりする。「嬉しい」「もっと知りたい」という声も毎年聞かれる。ところが以上は、大学の授業に限られた話である。

結論から話をすると、大学で勉強する時間以外にも、フランス語でコミュニケーションを取る方法はある。昨年、Twitter を道具として使い始めた先生の話を聞いて、刺激をうけ、Twitter を見てみたら、知らない学生がフランス語で沢山投稿をしていた。一般ユーザーと思い、自然に返事をしてみた結果、学生から「嬉しい」という返事が来た。そこで、クラスの壁は越えられると私は感じた。毎日、Twitter のアプリケーションを開き、投稿した学生もいた。頻繁にやり取りしたところ、ある学生は自分の嬉しい気持ちや悩みなど心を開いて、話をしてくれた。思いがけない絆が生まれた一例である。

[1] 坂巻洋子（2018）『フランス語日記』三修社。フランス語学習ツールとして三修社「フランス語日記 Twitter」を紹介させていただいた。https://mobile.twitter.com/monfrancais5922

教室にいるより、インターネットになると、なぜ学生はもっと積極的にプライベートなことまで話をするのかを考察していきたい。本論考の題名は「短文発信」であるが、その短文というのは、先生からの指示（メッセージの内容や書き方等）もなく、学生は自分の言葉で、自分が言いたいことを自由に発信するというものである。それは、クリエイティブな活動に相当することだと言えるだろう。言語的なゲームなどの専門家であるフランシス・デビセールは、« On s'est alors aperçu que des apprenants jeunes, même des débutants avec un faible niveau et de faibles moyens, pouvaient prendre du goût et s'exercer à la créativité sans attendre d'avoir 200 heures d'enseignement[2] » と語った。学習者のレベルやメッセージの媒体と関係なく、最低限の道具こそ、学生のクリエイティブなメッセージを生むのだ。

私も、自分が教えている大学の大学生に紹介し、今年度 Twitter でメッセージを投稿してもらう予定である。大学だけではなく、アンスティチュ・フランセ関西（外国語学校）でも、同様に取り組みたい気持ちはある。しかし、学習者の中には高齢の方もいるので、その辺りの配慮は必要であろう。そのようなバリアがある時、「高齢者の方は Twitter を使ってどのように発信できるのだろうか」。この点について今後考察していきたい。

短文発信で楽しむフランス語の世界

鈴木 真太朗　SUZUKI Shintaro

初級フランス語の授業を大学で担当し始めた論者は、当初、フランス（語）に多少の関心がある方を受講生として想定していた。確かに、「フランスに留学したい」などの積極的な理由で受講する学生もいる。だが実際は、そのような学生だけではなく、むしろ、「選択必修だから」などの消極的理由でフランス語を受講する学生も珍しくはなかった。積極的な理由であれ、消極的な理由であれ、数ある外国語の中からフランス語を選択する学生に、それを学ぶ楽しさを少しでも伝える方法はないだろうか。この問題については豊富な先行研究があるが、今回論者は「書く」という側面からこの問題へのアプローチを試みた。具体的には、「授業で学んだ語彙や表現を用いて日々の出来事を呟いてみよう」と受講生に提案したのである[3]。以下、この試みの成果と課題について簡潔に記す。

身体など、伝達を助ける手段が豊富な「話す」ことに比べ、「書く」ことには言葉以外頼るものが無い[4]。ましてやフランス語である。短文とはいえ、初修者には難しいと思われるかもしれない。だが「文字を入力するだけという手軽さ」や「気晴らしの場」といった Twitter の特長を生かしたところ、意外にも後述の成果が得られた。

導入手順はおよそ次の通りである。先ず、Twitter 仏作文に関心のある学生に対し、授業で学んだ語彙や表現を使って例を示す。それに倣い短文で呟いてもらう。この際、文法を過度に気にせずに学んだことを活かして呟いてみる、短くて良いので継続的に発信する、という二点を特に意識するよう助言する。定期的に学生の呟きを（当人の了解を得て）授業中に紹介し、よく書けている点を褒めたり、必要に応じて添削したりする。

---

[2] Debyser, F. (2000). Le BELC : un entretien avec Francis Debyser. *Le BELC a 40 ans*. Sèvres, CIEP, 17-18.

[3] その際ツールとして、三修社の「フランス語日記 Twitter」（https://twitter.com/monfrancais5922）を提案した。

[4] 中村啓佑・長谷川富子（1995）『フランス語をどのように教えるか』、駿河台出版社、101 頁。

こうした取り組みを重ねるうちに、最初は教科書的な文しか書けなかった学生が、授業で扱っていないはずの語彙や表現、文法を使って、独創的な呟きをすることが増えていった。フランス語に無関心だったある学生も徐々にフランス語学習を楽しむようになっていった。発信し続けることで彼は、フランス語ネイティブ[5]からコメントをもらうという、教室だけでは得難い経験をしたのである。

全受講生が上記の取り組みに賛同し、参加してくれたわけではない。それ故全受講生がアクティヴになったとまでは言えない。だがこの取り組みに参加してくれた学生の中には、履修を終えた今でも継続的にフランス語で呟き、学びを続けている学生や、仏検などの外部試験に積極的に挑戦している学生もいる。また、「フランス語は楽しい」という雰囲気がクラスに醸成されたのも事実だ。短文発信を通じたフランス語学習はこのように、授業に変化を持たせる上で補完的役割を成す場合がある。

確かに以上の試みには、有用性の統計的検証や中上級者を対象とする検証など、課題は残る。しかし、しばしば外国語発信力における課題を指摘される日本人学習者、とりわけ初修者の発信型の訓練においては、まず Twitter などを通じた疑似発話的仏作文で自信をつけさせ、それを基盤にして正確な発音や実際のフランス語会話への関心を持たせる、という方向性は有効ではないか。また近年は、インターネットの普及により、コミュニケーションは音声よりも、かえって文字の方にシフトしている。より身近な会話的文字表現にまず慣れさせ、そこからより高度な文章作成の方へ誘導していくという方向性も考えられるのではないだろうか。

短文発信の限界

玉田 優花子　TAMADA Yukako

筆記試験が得意な学生と、グループワーク等の活動に積極的な学生との間には、必ずしも有意な相関関係があるとは限らない。このように考える筆者は、「読む・書く・聞く・話す」の 4 技能をバランスよく扱うことを授業の方針としている。中でもいわゆる仏作文をすることと、Twitter で呟くということは、同じ「書く」活動とはいえ、性格は大きく異なる。日記的に短文を作成し呟く「Twitter 仏作文」の特質を利用すれば、より多くの学生が「書く」ことへの苦手意識を克服し、延いては外国語学習の最終目的であるコミュニケーション能力[6]をも自然と取得することができるのではないかと目論見た筆者は昨年、Twitter 仏作文を授業に導入してみた。ところが筆者の担当した授業の場合、これは上手く機能しなかったと言える。その具体的な状況について、とある工業系大学の初年次 2 クラス計 28 名の例を取り上げ、以下に記述する。

導入方法としては、半期で全 15 回の授業のうち数回が終了した頃、『フランス語日記[7]』を紹介した。その際 Twitter 仏作文の利点として、以下の 3 点を挙げた。この書籍の帯にあるように

[5] 次の論文では、外国語初修者に、「本物」（ネイティブのフランス語実践）を提示する必要性が説かれている（伊川徹（2019）「私の視聴覚道具箱」、『RENCONTRES』、第 33 号、32 頁）。
[6] ネッテンとジェルマンの研究によれば、外国語学習は、第一に知識（語彙、法則、活用等）を取得し、第二に得た知識を練習問題によって定着させ、最後にそれをコミュニケーション活動における使用に転移させる、という 3 段階の過程を経る。Netten, J. & Germain, C. (2012). A new paradigm for the learning of a second or foreign language: The neurolinguistic approach, *Neuroeducation*, 1(1), 88.
[7] 坂巻洋子（2018）『フランス語日記』三修社。

「会話と違っていくらでも時間を掛けられる」のが文章を書く際の大きな利点であること、Twitter は教科書的な純粋培養の例文とは異なり「生きたフランス語」のひしめく場であること、ツイートのための短文作成は自己の模索と表現に繋がること、である。またプライバシーを考慮し、例えば架空のフランス語名を設定して、専用のアカウントを開設すること等も提案した。以降の授業では、その日の学習内容に関連した『フランス語日記』の例文並びにその応用例を提示し、復習も兼ねてツイートをしてみることを促した。

上記の呼びかけに反応し、本書を購入した学生は 8 名いた。専用アカウントであればやってみたいと意欲を見せた学生や、公式アカウントをフォローして閲覧していることを告げてくれた学生も複数名いた。しかし、実際にツイートという行動に至った者はひとりもいなかった。

この原因を探るため、半期振り返りの一環として、Twitter 仏作文に係るヒアリングを実施した。手順としては①Twitter 仏作文導入への賛成・反対とその理由を用紙に記入してもらった後、②導入する場合にはどのような形が望ましいかをグループで議論し、発表してもらった。

結果は、①では賛成が 11 名、反対が 6 名、条件付き賛成が 11 名であった。賛成者の主な理由は、時代に合う、気軽に関わりやすい、文章作成には「考えたり調べたり」する作業が求められやりがいがある、「例文が無限に広がる」等であった。反対者の理由には、Twitter をやっていない、やっているが閲覧しかしない、プライベートなものである SNS を授業と結びつけてほしくない、文法の誤りがログとして残るのが恥ずかしい等があった。条件付き賛成者は、Twitter は勉強の意欲が出ないときでも気軽に使えそうだが、アカウントがばれるのが嫌だという理由や、行き過ぎた使い方でなければよいと思うが、個人情報の流出には十分注意を払ってほしいという理由を挙げた。ここで重要なのは、総じて一定数の者が形式的な賛成を示すのに対し、実際には誰もツイートを行わなかった点である。②では、「ツイートしたい一文を日本語で作成するので、各部分に 4 択を与えて課題にしてほしい」という示唆的な要望が出された。

以上が、筆者の導入事例において浮き彫りになった Twitter 仏作文の限界である。確かに、スペルミスへの懸念のフォローなど、教員側の配慮が足りなかったことは否めない。しかし、必ずしも Twitter 仏作文に頼らなくとも、「書く」活動を効果的に展開する余地はあるのではないだろうか。学んだ知識を活用したコミュニケーションを促すために、Twitter 仏作文がどの程度の役割を演じることができるかについては、今後の課題としたい。

おわりに

以上の論考は、「書く」ことを軸に置き、Twitter という SNS ツールを授業で活用した例と、そこから導き出したその有用性と可能性、また見えてきた課題を抜粋して紹介したものである。これら Twitter 仏作文の取り組みは、授業内容の学習効果を直接的に上げることはしないかもしれない。しかし、フランス語を学ぶことへの興味やモチベーションを学習者から少なからず引き出すことが可能なのではないだろうか。学習者が他のフランス語学習者の存在を知り、授業外でもフランス語を通じて他者と関わり合うという貴重な経験を得るには、Twitter でフランス語を発信させることは有効な手立ての一つと言えるだろう。学習者のフランス語への関心や親しみをさらに大きく育て、彼らをより積極的かつ創造的なフランス語学習に導くにはどうすれば良いのか。今回は「書く」という側面に限定した、理論よりも経験を重視した考察であったが、その他の技能との関連も視野に入れて、今後も考察を深めていきたい。